## アンカラ、その1

私は、しばらく前からトルコに暮らしている。首都アンカラの郊外の街の一角、小さなアパートである。

トルコとはいっても、たくましい遊牧民族の住むような厳しい砂漠や荒野ばかりを考えてはいけない。イスラム的な戒律や歴史で重たく縛られた、エキゾチックで排他的なイメージだけでもない。また、観光都市、商売人の猥雑なまでの活気にみちみちたイスタンブールなどのイメージとも、ここは大分異なっている。ここは、そうだな、比較的のんびりとした都会、とでもいおうか。

現在のトルコ共和国は、第一次世界大戦後、英雄アタチュルクによって劇的に近代化されたという歴史を持つ。政治的にも文化的にも、ちょうど日本の明治維新のような激動ぶりだったらしい。アンカラはそのときに新しく設置された首都である。イスタンブールのように、如何にも歴史のドラマの舞台といった古い建築物が林立しているわけではない。もちろん、中心地に大きなイスラム教の寺院、ジャミイはそびえているが、なんとその下は大きなアメリカンスタイルのスーパーマーケットになっていたりする。

建物だって、近代的なビルディングが街の中心に立ち並んでいる。このあたりは、都会の寛容のおかげで、伝統や宗教や現代文明、風俗がマイルドに融合されているのだ。活気のある下町的な中心地、クズライやウルスと呼ばれる繁華街は、それらさまざまな世界のイメージが百花繚乱といった趣で、ごった煮風に出来上がっている。

## アンカラ、その2

女性がスカーフで頭を覆った典型的イスラムスタイルも、もちろん至極ポピュラーであるが、きれいにパーマをかけた髪をなびかせて歩く娘たちも多い。デパートのショウウインドウは、きらびやかな流行のファッションを競い、貧しい菓子パン売りの少年は街角でたくましく声をはりあげる。

小さなトルコ帽にイスラムの数珠を持ったおじいさん、スーツを着た口髭のビジネスマン、ニューヨーク・キャリアガール風スーツにパンプスの、無国籍風現代女性も、何の違和感もなく入り混じって闊歩している。

ここらでは、寧ろスカーフ派の方が少数であろうかとも思われる。
人種的にも、もともとヨーロッパと中近東の境にあるこの国では、中近東系の顔立ちから純白人風までいて、同じトルコ人とはいってもその幅は広いのだ。

とはいっても、日本人、モンゴロイド系の顔立ちは、この辺りではまだまだかなり珍しがられる。外国人「ヤバンジ」（私は当初「野蛮人」と言われているのかとかなり驚いたものだ。）に大変友好的な気質を持つ彼らは、道でいきなり話しかけてきたりすることも多い。流れ者の私だが、おかげで何だかんだと何人かの友人を持つ機会に恵まれた。

そのうちのひとり、近所に住むムスタファは大変おもしろい男である。彼は、英語と日本語を少し話すので、この半年ばかりの間に、我々はかなり親しくなった。

だが、彼が一体どんな仕事をしているのかは、実は未だによくわからない。

いつ訪ねていっても大抵ひまそうにタバコを吸ったり本を読んでいたりする。話によると医者のような仕事をしているらしい。彼と知り合ったのも、その仕事関係でだ。だが、本人は、いわゆる医者ではないと言っている。（何しろ我々の会話は、日本語と英語とトルコ語のチャンポンで、推測力が勝負のコミュニケーションなのだ。）

話を統合してみるに、どうやら漢方医と呪術師とカウンセラーを足して三で割ったようなものであるらしい。ひと昔前には、世界中のどの村にもいた、村はずれの賢人といった趣である。

## 五月の散歩

　ある、いい五月の宵だ。

　今日は、小さなこのアパートの庭では、一日じゅう穏やかに散水器が鳴っていた。明るい芝生と小さなつるばらが、きらきらした水を静かに浴び続ける、長いまぶしい午後だった。

　…この国では三月の終わりからサマータイム制度を取り入れているので、六時、七時ではまだまだ日は落ちない。ながいながい、美しい夏の夕暮れが、やっと始まる時間なのだ。とても広い、澄んだ空は、昼間の淡い空色から、明るい濃い青へ、そして甘い柔らかい珊瑚色の夕焼け色に、と、ゆっくりとその色を変え、やがて深々とした凄みを湛えた群青に落ちてゆく。

　その一瞬の真っ青な空に、家々の懐かしい灯りが灯り始めるところを見ていると、私はいつも、何だか呼吸がすうっと楽になるような不思議な気持ちになる。街や自分たち人間の営みのささやかさと、世界の広大さが、互いに寄り添っている優しい調和を感ずるのだ。

　そして、その貴重なひとときはまた、散歩に出るには実に恰好なときなのである。

　いつものくたびれた上着をはおると、私は部屋を出てムスタファのところまでぶらぶら歩いてゆくことにした。わざわざ連絡はしていかない。向こうがいなければいないでいいし、まあこんなにいい五月の宵だ。奴は多分、夕暮れをいっぱいに映したあの広い窓のところで、ソファに座って、レコードでも聴いていることだろう。

　あの部屋は大きくはないが、なかなか居心地良く出来上がっているのだ。

## 植物公園

外に出て、ふと見上げると、背の高いすずかけの木がすらりとそびえたち、若芽が穏やかな風にふるふると揺れている。明るい黄緑が、そろそろ夕もやの薄紅を帯びて、優しい色だ。私はひとつ深呼吸をして、この優しい色の絵の中を歩きはじめた。

この街は、地形がでこぼこで、坂だらけだ。右の車道を、勤め帰りの人々を乗せたボロバスが、ふうふういいながらやっと上ってゆく。実にこの急勾配ときたら、この街で自転車に乗る人など滅多に見ない必然を生み出すくらいだ。私は西の空に向かって、急なその坂をゆるゆると上ってゆく。

左手は、道から落ちるゆるやかな崖のような谷間が、美しい植物公園に仕立てられている。寄り道をする勤め人や学生、子供等が入り混じって、木々の間で、てんでに緑を楽しんでいる様子が見える。平日では今の時刻が一番賑わうくらいだろう。

五月の木々の若々しい喜びと響きあうように、楽しげに輝いて笑う恋人たちとすれ違う。二人とも颯爽としたスーツ姿だ。（社内恋愛かしらん。）

…ふと甘い花の香りがながれてきた。

ああ、公園では今ライラックが盛りなのだ。夕もやの世界一面には優しい紫が点描されている。

そうだ、手土産にちょうどいい、久しぶりに商売抜きであれをやってみよう。

私は、ひときわ見事なライラックの株を選んで立ち止まると、持ち歩いている商売道具を取り出して、ちょっとした作業をした。

おもちゃのサッカーボールで遊ぶ子供らが、ボールを追いかけながら、一瞬、物珍しそうに外国人の私を見る。彼らのそんな視線には、もう慣れっこだ。大体において、それは好奇心を好意の混じりあった、くすぐったいような眼差しなのである。

　そこから五、六分歩いたところで、細い路地に入る。右手の小さなアパートの入り口から、ぎしぎしいう薄暗い階段を上って、KAT、2。日本式に言うと、三階だ。呼び鈴を鳴らす。

　数秒後、ごそごそと歩いてくる気配。ああ、よかった、やっぱりいた。ドアが開くと、暗がりに慣れた目に、西陽がいっぱいに射しこんだ部屋が飛び込んできた。目の前にムスタファのシルエットがくろぐろと浮かび上がる。

「やあ、君か。」
「うん。」

　ぬいぐるみのクマのようなひげ面が、にっと笑う。
　私はこの笑顔が大好きなのだ。誰でもつられて笑い返したくなる。我々は、ぶっきらぼうで親しい挨拶をかわすと、大きな窓に向かって斜めに３～４つ、しつらえた椅子に腰かけた。ムスタファが言う。

「熱いチャイでも淹れてこようか。」
「ありがとう。だけど、ここに来る途中、あんまりライラックが見事だから、お土産にと思って、＜取り出して＞きたんだよ。これを一緒に試してみよう。」
「やあ、そりゃ嬉しいなあ！今、ライラックが街じゅうで花盛りだもんな。よし。とっときのグラスを用意してこよう。」

　ムスタファは、彼の実験室を兼ねた台所の方へ行った。
　私もさっきの道具を用意する。その私の姿を、窓いっぱいの夕焼けが、夢のような琥珀色の光と影に彩っている。何だかうっとりとして、まるで遠いところから自分の手元を眺めているように、こころもち手つきが緩慢になる。

　異国にいるんだな、そして、故郷もまた、偏在しているのだ、という感覚を、全身が不思議な歓びのようにして感じる瞬間だ。
　私はかばんから、古い木でできた楕円形の箱を取り出し、さっき応急に取り出しておいたライラックの波動をその中に確かめた。ガラスの瓶の栓を抜いてテーブルの上にセットする。

　ここからが本番だ。呼吸を整えて背筋を伸ばし、私はその木の箱をてのひらでそっと覆う仕草をする。十本の指に感覚を集め、意識をライラックの淡い紫の波動に集中させる。脳髄から指先まで、私の生命の波動をライラックのものと調和させるのだ。
　さっきの公園での処置は、応急のコピー的な＜取り出し＞だったので、少しここで手直しして

おかなくてはならない。

…次第に指先があたたかくなり、じいんとしたエネルギーが紫色の光のイメージとなって、てのひらに集まってゆくのがわかる。

よし。

色彩に動きが出てくる。その光が手の中で、大きめのクリームパンくらいのふわっとした柔らかい光のしずくのイメージにまとまると、今度は注意深くガラス瓶の方に移動する。淡い紫色をした柔らかい光のしずくは、一瞬ふわりと浮いてから、無事にガラス瓶の中に納まった。

……ふう。一丁あがりだ。

　この作業は、一見手先で行っているように見えるが、手で直接に扱っているわけではない。周囲の空気の状況を按配しながら、自分の気配とのバランスをとってゆく、身体の動作と精神の動作の絶妙な心的結合である。重心は精神の方に置くのがコツだ。割りばしでふわふわ浮いてくる綿菓子を集めるような感覚で、光をふわふわと集めるイメージをつくる。結構な集中力とちょっとした技術が要る。
　私はこれをメシノタネにしているくらいで、割合技術には自信があるのだ。私の集める、もののエッセンス、このような光のしずくは、すべての苦みも酸味も取り落とすことなく、しかも十分に香り高く甘い、上質な香味をもつとの評価をいただいている。毎年、きちんと五つ星以上の評価を頂いている、公式アストラル委員会からのお墨付きだ。
　…本当は、ほんのちょっとしたコツで、誰にでもできることだと私は思うのだが、不思議に、いくら教えても、できない人にはできないようだ。自分の生命の波動を外部のものと連動させるやりかたは、やはり心身の免疫システムが危険信号を出してロックしてしまう領域になるのだろう。事実、この種の能力のある血筋の者は、自我の枠をコントロールするトレーニングをしない場合、早くに心身を病み、亡くなってしまう確率が高いのだ。亡くなりかたや、また心を病む姿であっても、それは、あたかも、世界に還元されていくような、独特の、巨きな至福の輝きを帯びたように見える、といわれてはいるが。

　さて、ライラック色の光は、半ば液状の様相を呈して無事私の瓶に収まった。ムスタファも何やらいろいろな形の瓶をごちゃごちゃとトレイにのせて戻ってきた。琥珀色を基調として、殆ど老木の幹のように濃い茶色から、ごく淡いトパアズの色まで、さまざまの金色の光がぎゅうっと濃縮されてつまっているような瓶だ。香水瓶程度のものから牛乳瓶ぐらいのものまで、大きさもいろいろである。そして、ひとつひとつに手描きのラヴェルが貼ってあった。

　「こりゃ随分きれいなもんだなあ…。一体なんだい？」
　ムスタファは、子供のように嬉しそうな顔をしてにやにやと笑う。
　「ただのBal（蜂蜜）だよ。ちょっと後で説明する。とりあえず先に君のライラックをくれないか。さっきから甘い香りがして、たまらないよ。」

## パザルの名産品

　トルコの名産品といえば、まあいろいろとあるんだが、蜂蜜もその有力なもののうちのひとつであると私は思っている。

　絨毯や金銀宝石、飾り皿ばかりが有名なようだが、この国は、意外と豊かな食に恵まれている。Boluなど、蜂蜜名産地として名高い町では、町を通り過ぎるドライブロード、国道の脇にも、いくつも小さなバスストップのような小屋が立ち並び、素朴に瓶に詰めただけの蜂蜜がたくさん並んでいる。
　車を停めると、（普段は国道とはいっても、がらがらに空いているから簡単だ。）番をしていたおじいさんやおばあさんが、どこからともなく現れ出てきて、その蜂蜜を売ってくれるという仕組みになっているのである。
　そこから少し脇道に入ると、アヴァント湖という大きな湖があって、観光名所になっているのだが、そこの市場でも、普通の花の蜂蜜、それからこの地方独特の、松の花蜜から蜂が集めるチャム・バル、つぶつぶとして小さな野苺のジャムなやくるみが名産品として売られている。
　普通の花の蜜と松のものとは、色はもちろん、味も香りも全然違う。同じ種類であっても、つくる農家や、その年の気候、蜂の調子によっても微妙に違う風味になるくらいなのだから。…松の実を食べたことがおありだろうか？あれと同じ、ツンと上に抜けるような清新なよい香りが、ちゃんと蜂蜜の芳香にも閉じ込められているのだ。

　最初、私は何だかわからず、指差して
　「Bu　ne？（これは何ですか？）」
　と尋ねたら、商売人のおじさんが、少し味見をさせてくれた。利き酒ならぬ利き蜂蜜体験だ。

　何しろ日本のものに比べると、ここは自然の力が、人間の、人工的な力を圧倒して、あからさまに強く表れているところだ。素朴な農産物ほどうまい。自然の力、神の恵みをしみじみと身体いっぱいに感じるパワフルなうまさなのだ。

　私のふるさとの日本、東京や大都市の中では、自然の力が、とてもとても小さく見える。痛々しいくらい人間の社会システムにその力、尊厳を吸い取られて、自然の力そのものが、あたかも「商品」であるかのように扱われている。
　大きなスーパーで、季節もふるさともないぴかぴかの野菜が蛍光灯に照らされている日常風景なんて、不気味なものだ。太陽や大地の巨きな力を、ともに浴びて育った同じ生命体として見ることなんてできやしない。種族としてのアイデンティティのない動植物ってとこだな。…まあ、私の商売道具としては使えない。

　その点、このワイルドなお土地柄のトルコでは、自然の気高く荒々しい力が圧倒的に優位を保っ

ている。自然を守ろうなんて逆立ちした発想はうまれてくるべくもない。ちょっとブスなりんごやオレンジ、いびつな野菜、その強い臭みや風味。それは農家の人々が自然の力と闘うようにして奪い取ってくる戦利品のようでもある。

　もちろん当たりはずれも多くて、はずれたときは虫食いや腐りものをつかまされる。買い物にもサバイバルの実力が必要となるワケだ。

## 「取り出し」について

…というワケで、活気あふれるパザル（市場）は楽しい。

私も自分の作品を時折露店に並べて売ることがあるが、売るのも買うのも、どちらもなかなか楽しいものだ。

今日のようなライラック、桜や薔薇などの花ものは、華やかで飲用にも化粧用にもよく、若い女性に人気の筋だが、私は、花専門という訳ではない。かなり広範囲にわたって、対象から、その精髄を半ば液状化した光の状態で取り出す技術を持っている。

まあ一般的に「取り出し屋」と呼ばれる人種だ。例えば、そうだな。ポピュラーに売れるものとしては果実、薬草、ハーブ、樹木、鉱石。これは種類によって薬にもなる。ムスタファのような民間医者にも時折注文されるものだ。大気や、光そのもの、炎や水から「取り出す」ことのできる連中もいるようだが、世界でも、ごくまれな上級の師匠クラスに限られる。もう少し頑張れば、私にもできるかな、とは思っているのだが、酔狂で行うには苦労と危険が大きすぎる。

さて、ムスタファが専門にしているという昔からの民間療法。これは、洋の東西を問わず、それぞれの土地固有の薬草や薬石を使ったヴァリエーション展開で、世界各地に共通して存在してきたものだ。優れて土地の人間に合っているものだが、何しろ薬効を取り出すためには、煮込んだりさらしたり、すったり、砕いたり、長い間酒に漬けこんだり、各々に恐ろしく手間の込み入った秘法のレシピが言い伝えられている。

私はその代わりに、対象物の精髄、というか、種のアイデンティティ、特有波長を読み取り、それを純粋なエネルギーのかたちで取り出すのだ。その波動は、形而上と形而下の、きわどい境界領域に位置する。そして、柔らかい光や濃密な気体、或いは、軽やかな液体のような質感の、微妙な色彩をもった気配として、人間の五感に現象する。
優秀な取り出し屋が、純粋なかたちで取り出したものは、人間の精神と身体の両方面にダイレクトに作用するため、その効き目は大変に強いものだ。個のしがらみを超えた自然種としての純粋な生体エネルギーなので、何ら危険な残留物が残ることはない。
もちろん、強すぎる作用によって、己の枠が崩壊する危機がある、という可能性もないわけではないが、それは特別な方法で意図的に行わなければ、滅多には起こらない。

## ライラックを飲む

「よし、それじゃ入れるよ。散らさないように一緒に集中しててくれよ。」

　二人で向き合って、神妙にテーブルの上の瓶を見つめると、私はムスタファの用意したグラスに、注意深く中身を注ぎいれる儀式的な動作を行った。もちろんこれはエネルギー体、物質であって物質でないものだから、それは動作と精神とを調和させるための動き、あたかも半覚醒状態でのゆるやかなダンスをするようなしぐさとなる。

　そうして、それは、透き通った藤色の、とろりとした光となって流れ、少し暮れなずんできた部屋に、香りとともにふわりと広がった。

　「ああ、いつ見てもいいねえ。君は実にいいウデをしている。実際、光を飲むのももちろん素晴らしいけど、オレは君が一連の作業をする、その動きを見てるのも好きなんだ。まったく素晴らしい。芸術だよ。」
　「そこまで言ってもらえるとは光栄だな。まあじゃあ乾杯と行こうや。」

　コチンとグラスをあわせると、柔らかい水晶のような光が少し波立ち、壁に映った藤色の光がゆらゆらと揺れた。窓の外では、暮れてきた街に、静かにコーランが流れ出している。

　グラスを口まで運んだところで、急にムスタファが顔を上げて、こう言った。

　「ちょっと待った。ほんとは後でパンに塗って、と思ってたんだけど、この蜂蜜、すこうしこのライラックと合わせてみないか。何だか香りが合いそうだ。」
　「えっ。それはやってみたことはないけど…。うん、よし。試してみるか。」

　並んだ瓶の中から、牛乳瓶ほどの大きさの、ずんぐりとした濃い黄金色のものを選ぶと、ムスタファは細い匙で、ひとしずくずつ我々のグラスに分けた。くるくるかき混ぜると、ねっとりと底に沈んだその濃い黄金は、淡い紫の中で夕焼け空のようにきらきらと渦を巻き、不思議にすうっと溶けていった。カクテルの色は、少し優しいものに変わったようだ。

　ひとくち含むと、ライラックの香りが口いっぱいに広がる。

　思わず一瞬めをつぶってから、ぐっとひといきに飲み干した。
　淡い藤色のエネルギーが、甘い香りと光の波動となって、喉を通り、身体の各器官をいちいち透き通らせるように輝きながら、胸を通り、お腹に入ってゆくのがわかる。そして、じんわりと身体じゅうにその甘い香りが広がってゆく。その光のイメージが、脳髄にまでじいんと沁みわたったとき、我々は微光の中で目を開いた。

「そろそろ始まるぞ。」

ムスタファがわくわくした顔をしている。

## ライラック・トリップ

　夕闇の濃くなった部屋で、私たち二人は椅子に座ったまま、淡いライラック色の光に透き通っていた。その甘さに陶然となっていると、やがて脊髄の中心あたりから、ソーダ水がしゅわしゅわとはじけるような軽い感触がうまれて、徐々に広がってゆく。

　ライラックの生命が、光の中に束の間の夢を広げてくれるのだ。

　光のもやがいよいよその濃度を増し、微妙に色を変えてくる。さっきの、うすべにいろの風の吹く、まだ浅い夕方だ。夕もやの匂い。さっきのままの公園のざわめき、通りに車の音。

　さらさらと夕風になびく感触は気持ちがいい。それは、トルコのこの大地に、街の人の愛しみによって植えられた公園のライラックの気持ちだった。
　私は大地にしっかりと根を下ろし、そこからふわりと枝を広げ、柔らかい緑の葉をつけ、そして甘い華やかな香りを街じゅうに誇らかに流すようになった、一本のライラックだった。
　そして私はこの一株のライラックだったが、今、アンカラの街じゅうに咲き誇っているすべてのライラックにも通じていた。どこの公園の株が最も古く、どこのものが最も見事な大輪の花をつけて、どこの庭に株が今年初めて咲いたのか、そんなひとつひとつのことが、まるで街じゅうを一望にしているように、すべて分かった。

　というより、私が街じゅうのライラックでもあったのだ。ムスタファのイメージもあちこちのライラックに漂っている。アイデンティティの枠は自在に伸び縮みした。

　…ああ、こんなにも植物は自由なのだ。

　あちこちに広がるのをやめ、足元に意識を凝らしてみる。私の根は大地の確かな温かさに触れており、そしてそこには空に向かって命を伸ばしてゆこうとする意志の力が内在していた。樹液とともに上方に意識を駆け上らせる。空にむかって手を伸ばし、伸びてゆく感覚。濃い空がねっとりと青く私を包み、また目のくらむような星空がきらきらと笑っていた。

　これは一体何の夢なのだろう。

　時間の意識を持つと、たちまち私は種子の記憶へとさかのぼってゆく。フィルムを逆回しするように、小さくなってゆく。ぐんぐん縮んで、くるくるとまるまって、ぼんやりとした眠りの意識に近くなる。…私は眠っている。（このあたりでライラックの力は薄れてくる。…そろそろ覚めるころかな。）

　しかし、どうもいつもとは違うようだ。一旦薄れかけた夢の力が、少し色の調子を変えてきた。

[illegible]
…ムスタファの蜂蜜のせいだな！

# 蜂蜜のおまけ

　種子の眠りの中で 漂いながら、私は私の身体の枠や、時計がカチカチと刻むことのできる限られた時間の中、今日と明日とに閉じ込められていることが、どうしようもできないこ のことが、そのままで、ふわっと別の意味の光を持ってくる地点に辿り着いた。眠りの夜のなかに裂け目ができて、そこからこぽこぽと無限の光が湧き出ている ようだ。

　ころんと裏返ってしまう、私の存在の枠。

　そして、「ああ、何もない」、と思ったとき、そこには、懐かしい蜂蜜の色、微妙な琥珀色を透かして見た空のような色の光があったのだ。

　母のいる家に帰る 途中、いつか見たあの故郷の夕暮れの空の色。そして、不思議に早朝ぱっちりと目覚めてしまったときの、頭の芯が冴えわたるようなあおあおとした静けさの 中、やがて窓を染め出す朝陽の黄金の色。いつか見るべき風景が、とても懐かしい、とろりと重い質感をおと甘い香りを伴ってやってくる、そんな確信が、ただ そこにあった。
　どこかでころんとした木琴のような音が、軽やかに鳴っている。私の背骨がリズムを打っているようだ。

　しばらくすると、その響きはさまざまなざわめきを伴い、蜂の羽音と花が開く音になった。蜂蜜の町、ボルの町はずれの野生の花畑だ。
　平和な真昼の光と、ぶんぶんいう蜜蜂の羽音。はちみつの香りがして、あたりは金色に輝いていた。陽気な夏の太陽の金色だ。
　そ の香りは、ただ甘く華やかな花の香りのようでいて、少し田舎の農家のような、たまらなく懐かしい優しいひなびた匂いでもあった。燦々と降るその懐かしい光 のなか、花の色とその甘い香りに夢中になって追い求めていると、空間が突然ぐうっと広がり、夕暮れのアンカラのライラック色が、地方都市の郊外の風景と響 きあうように重なった。

　そのライラックの繁みにも、軽い羽音をたてて蜜蜂は戯れている。

やがてその夕暮れは、次第に闇を濃くしてゆき、澄んだ月夜が現れた。そして、窓いっぱいの月夜を映したテーブルには、濃い黄金色のはちみつの瓶と空のグラスが静かに二つ並んで、ただ淡い月の光をすうすうと透き通していたのである。

　ああ、私は私だったのだ。

　少しぼんやりしてからはっと見ると、目の前のムスタファも一瞬遅れてこっちを見て、びっくりしたようにぱちぱちとまばたきをした。

　まだ、少し甘い香りと輝きが、身体の中に残っている。

　「…いやあ、はちみつは思いがけない効果だったなあ。」
　ムスタファが、照れたように少し笑ってこう言った。
　「それにしても、素晴らしかった。やっぱり君は一流の取り出し屋だな。」
　「いやいや、僕のいつものパターンでは、今日みたいにはならないよ。最後のあたり、あんなのは初めてだった。あのはちみつ、すごいじゃないか。ライラックエッセンスとの相乗作用だとしても、ただのはちみつじゃないだろう。

　「うん。これはちょっと特別さ。この間、ボルの養蜂家のあいだで、たちの悪い熱病が流行ってね。人づてに俺のことを聞いたらしくて、手紙が来てね。頼まれてあすこまで行ってきたんだよ。その熱病は土地の精霊とのちょっとした行き違いで起こったもので、まあなんとかうまく治まったんだ。そしたら、みんなえらく喜んでくれてねえ。治療費のほかに、それぞれの家に伝わる、貴重な秘伝のはちみつを譲ってくれたんだ。」

　ムスタファは、いかにも大切そうに、トレイの上の幾つもの瓶を示した。

　「彼らが商売用のものと、先祖伝来のやりかたを守った自分たち家族用のものを、必ず別口でつくってるってのは知ってるだろ。自分の家独特のものは、ご先祖様そのもののように大切に秘密に守って、決して売らないんだ。単に材料が違うとか、製法が違うだけじゃなくて、いろいろ秘術があるらしいよ。中にひとり、えらく雄弁な蜂蜜学者がいてさ。たっぷり一時間は講義をきかされんだ。いわく、アラーの神が蜂にお与えになった特別な才能と役割について、蜂と花の織り成す素晴らしい芸術性、美しさについて。蜂蜜が、いかに人間の健康に大切であるか。それから、熱も加えてはいけないとか、光にさらしたり冷蔵庫にいれたりしても、微妙な成分や酵素や、太陽のお恵みが壊れてしまうから厳禁だとか、そりゃ大変な蜂蜜信奉者だったよ。…だけど、それを聞いてたら、何だか本当にすごくありがたくなってきちゃってさ。テーブルの上の瓶が、神々しく輝きだすように思ったね。その後で、ひとなめずつ味見してみたら、それぞれがみんな違う、素晴らしい味と香りで、俺は、以来すっかりこの蜂蜜がやみつきってわけさ。」

　「今のは、その蜂蜜理論家ご自慢の逸品だったんだぜ。さすが、君のライラックに負けない効果

がでたよなあ。」

## 帰り道

　はちみつとはまた、このクマづらの友人にぴったりのアイテムじゃないか。イギリスの童話「くまのプーさん」に出てくる、はちみつをなめるくまの絵を思い出して、私は心の中でにやりと笑った。しかし、件のはちみつは、本当に手足の先まで満ちわたる元気の源であるようだ。お土産に分けてもらった小さな瓶をしまったかばんを大切に抱えて、私はあたたかな気持ちのまま、友人の住むアパートを出た。

　頬をなでる夜風の快さにふと目をあげると、私の頭上はるか高くには、まるでトルコの国旗のように美しい形の三日月と星が、よく晴れた初夏の薄いすみれ色の空の中でちらちらと瞬いていた。

　ふいっと、月の光をとりだして、蜂蜜をブレンドするという、新たなたくらみを思いついた。

　そうして私は、その夜の、あえかな光と影のさんざめく帰り道、夜空の星座の中を歩いているようなふわふわした心持ちのまま、ずっとその方法を考えながら歩いていたのである。

# トルコ日記〜ライラックの蜂蜜

http://p.booklog.jp/book/51725

著者 : yamamomon
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yamamomon/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/51725

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/51725

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ